

◎自由発表（第1会場）

【演題等】「ほんまはいきタイねん一本音から始まる復帰物語」

【講演・発表者】 東大阪市立若江小学校 教頭 入口 浩樹
首席 齋藤 千佳

・発表概要

全員が揃う日をめざして、2年前から本校で取り組んでいる不登校等対応について発表する。

個性や保護者、信頼度、チーム体制、課題などからアセスメントし、解決の糸口を教員のアプローチによって掴み、復帰に至った10名中の6名と取組中の2名の事例をもとに、ターニングポイントとともに子どもたちの物語の軌跡を追う。

アプローチはかかわる教員の強みによって変わる。自分ならどうするか、かける言葉はどんな言葉か、どんな行動をするか、チームにはどんな働きかけをしてほしいかなど、ワークシートを用いたワークを取り入れながら、進めていく。



・発表要旨

1 本校が取り組んできた不登校対応

（1）予防的対応（早期発見・早期対応）

① 欠席連絡

保護者の声の抑揚や間の取り方、連続の欠席、欠席理由から「どうかしましたか？」の声をかけるために、本校では、電話対応をしている。

② 子どもの様子

どんな点を気にするのか、どんな声を掛けるのかを考えている。例えば本校のアンケート調査で、「自分に良いところがありますか」という質問に対して、否定的な回答が20%以上である学級で不登校児童が出始めたというデータがある。このような客観的なデータにより、子どもの様子を把握することができる。

③ 教職員の対応

どれくらい対応を続けるか、誰が対応するか、その教職員と子どもはどんな関係か、どんなステップを構築するかを考え対応している。

（2）成長を促す指導（学校・学級づくり）

① 達成感（目標に向かって取組む）

子ども全員が同じ方向を向いて取組を行うことができているかを大切にしている。課題や困難の状況から抜け出すために課題解決的な指導から、子どもの成長を促す指導へと意識を変えることにしている。子どもへの仕掛けが子ども主体となり、子どもたちの姿を認め、励まし、最後に褒めることが重要である。

② 自己肯定感（居場所づくり）

子どもが落ち着けるクラス、教室が安心安全なクラスになっているかということを大切にしている。

③ 違いを認める（仲間づくり）

どのような意見でも受け止められるような雰囲気の中であれば、「自分の意見も言ってみようかな」と思える。大切なことは「先生が本音で語る」ことであり、子どもたちにどうなってほしいのか、どんなことを大切にしてほしいのか、どんな学びを作り出したいのか、先生が生の言葉で語った言葉は子どもたちに伝わる。

(3) 事後対応

ワークシートに記載がある学力不振によって自信をなくした A さんの事例を用い、どのような言葉かけを行うか、どのような対応を行うか、どこにポイントをおくかを考えていただきたい。

本校で実際に行った対応について、紹介する。その他の事例については、資料を配付するので、確認いただきたい。

2 まとめ

まずは、不登校を起こさせないことが大切である。2 年前まで、20 名数名の不登校児童がいたが、現在 3 名まで減少し、3 名のうち 2 名は、今年度中に復帰する見込みである。

・質疑応答の概要

Q 1 様々な業務がある中で、教頭先生が関わられているが、何名くらい関わられたのか。また、持続可能な体制となるように、どのような学校の体制をつくられているか。

A 1 対応するのは、担任がベースである。担任が、安全安心な学級をつくっていただくが、私は、一時的に教室に入れなくなった子どもを一旦拾うセーフティネットの役割であると考えている。

心の回復を待ち、学年教員や教科担当教員等に戻すようにしている。子どもに「こうしよう」という声をかけるのではなく、子どもに「こうしてみたい」と言わせる仕掛けをするようにしている。